

第二次 入学試験問題

国語

函館ラ・サール中学校

2025. 2. 3

〔問題二〕 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

二〇二〇年春からのコロナ禍^かで、日本人はみなマスクマンになった。

ところがこの三年間、実はこの国ではマスク着用が「義務」づけられたことは一度もなかったのである。欧米^{おうべい}や韓国^{かんこく}、香港^{ほんこん}、台湾^{たいわん}では義務づけられていたのだが。ここで露わ^{あら}になったのが日本人の「同調圧力」の強さだ。政府は「要請^{ようせい}」とか「推奨^{すいしょう}」といった言葉を使ってきた。法律によって義務づけられた訳ではないのに、日本人は互^{たが}いに互^{たが}いを監視^{かんし}し合い、また他人の目を気にして、嫌^{いや}でも自らマスクをしてきたのである。

「マスク警察」(ここでの「警察」とは、私的に取り締まりや攻撃を行う一般市民や、その行為・(1)フウチヨウを指す*スラング)と呼ばれる人々もいた。この人々はとにかく逸脱^{いつだつ}する人を許さなかった。これはまさに戦中の「隣組^{となりぐみ}」(国民統制のためにつくられた地域組織)にも似ていた(私はその時代を生きていないので経験はしていないが)。敗戦して七十年余。令和になっても日本人には、隣人^{りんじん}を監視し逸脱^{いつだつ}を咎^{とが}める「隣組」的*メンタリテイが根付いていることに気づかされた。

で、二〇二三年三月十三日から「マスクは個人の判断で」という厚生労働省からのルールが施行^{しこう}されることになった。ところがこのルールが①ひびくルールの典型^{てんぎょう}なのである。

まず、冒頭^{ぼうとう}では「個人の主体的な選択^{せんたく}を(2)尊重^{そんじゆう}し、着用は個人の判断に(3)委^{あづか}ねることになりました」と言っているが、読み進めていくと「マスク着用の考え方」の箇所^{かしょ}で「アドバイザリーボード(諮問委員会^{しもん委員会})で示された専門家の考え方も踏まえ」とし、「基本的な感染^{かんせん}対策としてのマスク着用の位置づけは変更^{へんこう}しない」とある。

a 三月十三日から「着用は個人の判断で」に転換^{てんかん}するのには、二〇年春から三年間の専門家集団による「感染予防にマスクは必須^{ひつず}」という考え方は変わっていないのである。なのになぜ急に転換できるのか、その科学的根拠^{こんきょ}が示されていない。これでは着用をやめようとする人も不安だろうし、それで何かあったら「はい自己責任ね」と片付けるつもりなのか。

b 「個人の判断で」と言っておきながら、そのあとにさまざまなケースを挙げ、「マスクの着用を推奨する」「着用が効果的」「着用しましょう」「着用をお願いします」と、とにかく I なのである。

言い方が命令でなくても、日本人はそもそも三年間、政府による義務づけなしに「要請」だけで自縛^{じぼく}してきたのだから、これだけいろいろ「推奨」されれば、結局マスク着用を続けた方がいいと思わされるだろう。

日本のルールの示し方に私は昔から疑問がある。公共的な場を利用する不特定多数の人々に何かを必ずやめてほしい場合でも「くを禁止する」とはっきり書かずに、「くはご遠慮下さい」「くはお控え下さい」と曖昧に示すところだ。「店内での携帯電話での通話はお控え下さい」「ここから先、立ち入りはご遠慮下さい」など。

「ご遠慮下さい」は、いつからか日本で使われてきた*婉曲的表現だ。不特定多数の人々に何かを禁じる場合、「禁止する」とか「やめろ」と表現すると厳しい印象を与えるので避けようという配慮から、物腰柔らかな表現が使われるようになったらしい。

日本で生まれ育ってきた人々には、これらの婉曲的な表現でも「あ、禁じられてるんだな」と了解されてきた。だが近年では、「控え目にならやっていい」とか「自分は遠慮しない」と解釈して行動するケースがみられるという。今のところはこういったケースを「非常識だ」「ニュアンスがわからないのか」などと批判する日本人は圧倒的に多いかもしれない。

C 言語的には、完全禁止の表現をしなければ、「やってもよい余地がある」という解釈を許す可能性があることも事実だ。英語表現には「NO EXIT (出口ではありません)」とか「NO SMOKING (禁煙)」というのがあがる。こう言われれば絶対にやってはいけないと誰でも理解できる。だが「Please refrain from... (くを控える)」だと何かと理由をつけてrefrainしない人々が出てくることを止めることはできない。

ルールを示す際の、②日本の伝統的な婉曲的表現にはたしかにそれなりに美德がある。しかし近年の「ロジカル」な人々や外国から来た人々には、それらは自己判断に委ねると解されても仕方がない。相手の自己判断に任せられることと、必ず禁じるべき理由があることとの区別はあるはずで、後者についてはきつい表現と思われようと、理由を明示してはつきり「禁止する」と示すべきだと思う。日本も国際化を目指しているのならなおのことだ。「ご遠慮下さい」だけで自制できるのは、今後は同調圧力に弱い日本人だけになると予想される。

ちよっと話はそれだが、マスク新ルールがルールとしていかにダメなのかの話に戻ろう。

「個人の判断で」と言いながら、「医療機関を受診するとき」「高齢者など重症化リスクの高い方が多く入院・生活する医療機関や高齢者施設などを訪問するとき」にはマスクを推奨というのは、体力や免疫力が弱っている人々にうつしてしまう危険を減らすためだと一応理解できる。しかし問題は「通勤ラッシュ時など、混雑した電車やバスに乗るとき(当面の取扱)」である。どのくらいを混雑とみなすのかについて乗客それぞれ見解が異なるはずだ。新ルールでは個人の判断が優先されるわけだから、「同調圧力に屈しない」乗客同士で採め事が起こるかもしれない。要するにルールとして

中途半端なので、かえって現場に混乱を生む可能性がある。

二〇二〇年からマスク着用を中途半端にルール化してしまったことによって発生したのが、まったく自発的な「マスク警察」であった。コロナの感染予防にマスクが有効だと信じられていたときには、公共交通機関や公共の場でマスク着用が要請されていたのは仕方なかったにせよ、ただの一人私人的に、マスクを着けていない他人を咎めつるし上げる人々が結構いた。そういう人々の背中を押したのが、「同調圧力」と「要請」という、政府が責任を負わずにすむような自生的なルールだったのである。

「マスク警察」はマスクを着けていない人々を見つけては責め立て、それが原因の揉め事で(4)シンコクな傷害事件まで起こったほどだ。事情があつてマスクを着けたくない人にとっては暗黒時代だったのであろう。

そしてマスク着用が、理由も明らかにされず突然「個人の判断」となった今日、かつての恨みを晴らしたい人々なのか、案の定「マスクするな警察」が出現している。

突然理由も示されず、「マスクは個人の判断で」と政府の呼びかけが転換されるやいなや、今度は「反マスク派」の中でも過激な人々が、自分の判断でマスクを着けている人々に対して、自分がかつて受けた嫌な仕打ちを与えているということに気づかないのだろうか。

「反マスク」の人々 Ⅱ、この(5)期に及んでもマスクを着けている人々 Ⅲ 全て「同調圧力」によってそうしていると思ひ込んでいる。だが何度も言うが、マスクを着ける人々 Ⅳ それぞれの自己判断で着けているのだ。皆が皆「同調圧力」のゆえではない。花粉症がつかいから、インフルエンザに罹らないために、風邪気味で咳やくしゃみが出るから、気管支が弱いから、などそれぞれの理由でマスクを着けている。有名な芸能人なんて街を歩くと顔バレするからマスクを着けるなんてことはコロナ以前からあっただろう。

だいたい「さっさとマスクを外せ」と攻撃的に主張する人々の論拠を見ると、大抵が「外国人に嗤われる」という、国際の世間体である。だがこういう議論こそ、外国人の目を気にして日本人の行動を強引に改めさせようという卑屈な考え方であり、(3)その意味では世界的な「脱マスク」の同調圧力に押されているのだ。いつでも欧米諸国のやり方の方が絶対に正しいのか？ 大谷翔平選手がグラウンドのゴミを拾うことは、ゴミを放置することより圧倒的に間違っているとこのだろうか？

欧米ではかねてからマスクは嫌われていた。欧米人は相手の顔の表情を見ながらコミュニケーションをとることが普通であり、マスクはその顔を覆い隠してしまうからだ。フランスでは二〇一一年にブルカ（イスラム教徒の女性が目以外の

全身を覆うヴェール）など、公共の場で顔を覆うものの着用を禁止する法律が制定され、「信教の自由に反する」と政府が信者から訴えられたが、欧州人権裁判所はフランス政府の立法や「顔は重要な役割を果たす」という主張を支持した。また多民族や諸外国人が行き来する国家では、顔を覆い隠す者は犯罪者かテロリストかも知れないと疑われやすく、その意味でもマスク姿は警戒されてきた。もちろんマスクに抵抗感のない日本でも、治安上の理由から深夜のコンビニにフルフェイスのヘルメットを被るなど顔を隠して入ることは多くの店で禁止されている。

だがコロナ禍以前から、日本ではマスクを着けるも着けないも各人の自由、勝手であって、他人の選択にあれこれ難癖をつける人はほぼいなかった。コロナ禍にあっても諸外国のようにマスク着用を義務づけられることもなかった。三月十三日の「マスクは個人の判断で」は、コロナ禍以前の日本に戻っただけのことである。

「脱マスク派」の人々は自由にマスクを外して、その見目麗しきご尊顔を披露して*闊歩すればよいだけの話である。誰もあなたたちを責めないし咎めない。なのになぜ、一部の「反マスク派」の人々は、自分と同じことをしない赤の他人を攻撃するのだろうか？ 別に外国人の視線を気にしなくてもよいではないか。それともこのような人々はそもそもマスクの存在を*蛇蝎の如く忌み嫌っていて、「禁酒法」のように「禁マスク法」を制定施行したいのだろうか？

④ コロナ禍以前の日常感覚に戻ればいいだけの話だ。もう一般的なマスクの是非について議論するのをやめるべきだ。他にも、「マスクを取って自分の素顔を相手に見せるべきだ」という理由からである。たしかにコロナ禍に生まれ育った幼児が、マスクのせいで人の表情を読めなくなるなどの懸念も指摘されている。もちろんそのような弊害があることは理解できる。⑤ しかしそれなら、「マスク美人」とか「マスクとったらガツカリ」とか言うなよな！

(住吉雅美『ルールはそもそもなんのためにあるのか』より)

*スラング……俗語。

*メンタリテイ……もの考え方。

*婉曲的表現……はつきりとはなく、ぼかして言うこと。

*闊歩……堂々と歩くこと。

*蛇蝎の如く忌み嫌う……非常に強く嫌い、避けようとする。

(一) 〓 線部(1)、(4)のカタカナをそれぞれ漢字に改めなさい。

(二) 〓 線部(2)、(3)、(5)の読み方をそれぞれひらがなで答えなさい。

(三)

I

 に入る、「行動の自由が奪^{うば}われている状態」を表す語として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア すつからかん イ あのでこのて ウ こてんぱん エ がんじがらめ

(四)

a

 く

c

 に入れる語として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 〓 ア つまり イ それでも ウ しかも エ なぜなら
b 〓 ア だから イ さて ウ あるいは エ しかも
c 〓 ア ところで イ あるいは ウ しかし エ だから

(五) 〓 線部①「ひどいルールの典型」とありますが、どのような点が「ひどい」のですか。次の中から適^あ当^たで^{ない}もの^を一つ選び、記号で答えなさい。

ア マスクの着用は個人の判断に委ねられているが、個人が判断するにあたっての基準があいまいなものであることから、混乱が生ずるかもしれないという点。

イ マスクの着用は個人の判断に委ねるといふルールを一方的に定め、自由で、他者に対して寛容^{かんよう}だった日本人の間にいざこざを起こしてしまったという点。

ウ マスクの着用について判断が必要になる場合ごとにさまざまな言い回しが用いられており、結果的に個人が判断できる余地が奪われてしまったという点。

エ 感染予防にマスクが必要だと専門家は考えているのに、政府が科学的根拠を示しませずに、マスクの着用を個人の判断に委ねようとしているという点。

(六)

——線部②「日本の伝統的な婉曲的表現にはたしかにそれなりに美德がある」の内容について次のように説明する場合、

A へく C に入る表現を本文中から抜き出して答えなさい。ただし、A、Bはそれぞれ十字以内、Cは二字とします。(読点や記号も字数にふくみます)

A	でも相手に真意が伝わるはずだと考え、	B	表現を用いないようにする
とこう	C	をす	ると。

(七)

Ⅱ へく Ⅳ に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア へⅡ が Ⅲ を Ⅳ こそへく
 イ へⅡ も Ⅲ こそ Ⅳ はへく
 ウ へⅡ こそ Ⅲ は Ⅳ がへく
 エ へⅡ は Ⅲ が Ⅳ もへく

(八)

——線部③「その意味では世界的な『脱マスク』の同調圧力に押されているのだ」とありますが、ここから読み取れる筆者の考えはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 日本人が手本を示してその正しさが初めて外国人に認められることもあるのに、外国の価値観の方が優れていると考え、「脱マスク」に従おうとするのは見当違いだということ。
- イ 人にはそれぞれマスクを着用する理由があるのかもしれないということを考えもせず、外国人から要求されるがままに「脱マスク」を主張するのは乱暴だということ。
- ウ 外国人が要求しているわけではないのに、彼らと同じ「脱マスク」の立場をとらなければならないと考えて、マスクを着用している日本人を批判するのはおかしいということ。
- エ 日本も国際社会で重要な役割を果たさなければならないのだから、多くの外国人が「脱マスク」の立場をとるのであれば、日本人もそれに従わざるをえないということ。

(九) — 線部④ 「コロナ禍以前の日常感覚に戻ればいいだけの話だ」とありますが、ここから読み取れる筆者の考えはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本人はコロナ禍以前から、病気にかかった場合は他人にうつさないように自主的な配慮をしてきたのだから、今後はどのような場合でもマスク着用に関して議論する必要などなく、個人の判断に任せておいて問題はないということ。

イ コロナ禍以前の日本では、マスクの着用については個人の自由であって、それでほぼ問題がなかったのだから、今後マスク着用在義務づけられる場合を除き、ルールを示す際に「要請」や「推奨」などの言葉は不要だということ。

ウ 日本はコロナ禍以前、マスクをしていても不審に思われないうつさな平和な社会だったのだから、常に犯罪やテロを警戒しなければならぬ欧米の考え方を引き合いにして、むだないぎこぎを引き起こすのは今後やめた方がよいということ。

エ コロナ禍以前の日本人は、相手の顔を見なくてもコミュニケーションをとることができていたのだから、今後はマスクを着用するとコミュニケーションがとれなくなるかどうかについて議論する必要はないということ。

(十) — 線部⑤ 「しかしそれなら、『マスク美人』とか『マスクとつたらガツカリ』とか言うなよな！」とありますが、筆者はなぜこのように主張するのですか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア マスクを着用していないことを非難されたかつての恨みを晴らそうとするのなら、マスクを着用している人の見た目をからかうのではなく、正々堂々と良し悪しを論ずるべきだから。

イ マスクを着用することが幼児によくない影響を与えるのを心配するのなら、マスクをしなければならない事情がある人を差別するような発言こそ、慎まなければならないから。

ウ マスクが幼児の成長に与える悪い影響まで引き合いに出して、素顔を人に見せるべきだと言うのなら、マスクを着用していない顔についてとやかく言うべきではないから。

エ マスクを取って素顔の美しさを見せることがすばらしいと主張するのなら、マスクを着用した自分を美しいと思い、その美しさを見せたいという考え方も否定してはならないから。

〔問題二〕次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

小学六年生の遠藤正は同級生の大林と小林に、二人のランドセルを持たされたり、教室の机の中にゴミを入れられたりといった嫌がらせを受けていた。そして、その嫌がらせのことを正は両親に話さないうでいた。一学期が終わって正は安心したものの、成績が悪かったことを両親に叱られ、八月になったら宿題をやったところまで父に見せる約束をした。

八月に入って最初の金曜日だった。夜の九時過ぎに帰ってきたお父さんが、僕を呼んだ。

「正。終業式の日にお父さんが言ったことを覚えているな？宿題がどこまで進んだか見せてみる」

僕は黙り込むしかなかった。お父さんが大きくため息をついた。

「正、これを見る」

お父さんの手には一枚のチラシがあった。H塾のものだった。

チラシには、『今からでもまだ間に合います！六年生のための八月短期集中補習講座』とある。

「おまえ、これに行く気はないか？」

僕は首を振った。勉強もする気にはならないし、なによりH塾には小林と大林がいる。絶対に嫌だった。そうしたら、お父さんの目が(1)険しくなった。お父さんはつけていたテレビをリモコンで消した。(2)シヨウメイの一つが切れたみたいに、リビングがすっと薄暗くなった気がした。

「宿題もしない、塾にも行かない。じゃあ、おまえは毎日何をしているんだ？母さんから聞いたぞ。部屋に閉じこもっているばかりだって」

視線を下にやる僕に、お父さんはこう続けた。

「外に遊びにも出ないそうじゃないか。おまえ、友達はいないのか？」

僕はもう目を上げられない。ともだち。ともだち。いるわけない。いるのは僕をからかっては重い荷物を持たせるやつだけだ。僕を子分にして喜んでる連中だけだ。

「まさか、いじめられてるわけじゃないな？」

ジーンズの両膝の上で僕は拳を固めた。拳はゆらゆら滲んで見えた。

お父さんは(1)僕のそんな反応を見て、なにかを察知したみたいだった。Aとした声で、僕の頭に落ちてきた。

「正。友達どうまくいってないんだとしたら、それはおまえのほうにも原因があるんじゃないのか？」

首の後ろがかっと熱くなるのが分かった。ぼたりとしずくがジーンズの太腿に落ちて、ゆらゆらしていた視界がはつき

りとなった。でもまたすぐに涙がわきあがってきた。プールの水を鼻から飲んでしまったように、目と目の間がつんと痛んだ。

僕は立ち上がってダッシュで部屋に戻った。

「おい、正！」

お父さんの声が追いかけてきたけれど、立ち止まらなかったし振り向かなかった。悲しいというより悔しくて腹が立った。小林と大林よりも、お父さんやお母さんに怒りを覚えた。

ずっと部屋に閉じこもっていることを言いつけたお母さん。

いじめられているのは僕のせいだと言ったお父さん。

扉の向こうからお母さんの声がする——正、出てきなさい。お父さんの話はまだ終わってないのよ。

誰が出て行くもんか、僕は止まらない悔し涙を何度も手でこすった。

サイテーだ、サイアクだ。なんで全部僕が悪いことになっているんだ。

——おまえの方にも原因があるんじゃないのか？

じゃあどうすればいいんだ。

ア 僕は手近にあったマンガ雑誌をベッドに投げつけた。それは一度バウンドして壁にぶち当たった。雑誌の

角が当たったらしく、壁紙がちよっと剝がれた。肩で息をついていると、網戸の向こうから夜の虫の声が絶え間なく聞こえてくるのに気づいた。遠くで車のクラクションが鳴った。リビングでは再びつけられたのだらうテレビの音をバックに、お父さんとお母さんが話していた。

——正、ドアを開けないのよ。

——放っておけ、そのうち出てくる。

——でもあのままじゃあ。

——だからあいつは駄目なんだ。

——あの子ったら、お風呂にも入らないつもりかしら。

イ ベッドに飛び乗って拳で何度も枕を叩いた。夏休みなのに。せっかく小林と大林から離れられたと思っ

ていたのに。家の中でもこんなに嫌な思いをさせられるなら、僕は一体どこへ行けばいいんだらう？

ウ

やがて洗面所を使う水音がし、微かに聞こえてきていたアナウンサーの声も消えた。ドアをばたばたと開け閉めする音の後、家中が静まり返った。どうやらお父さんとお母さんは寝たらしい——目覚まし時計を見ると、午後十時半を少し回ったところだった。

僕はジーンズの尻ポケットに小銭を突っ込んで、部屋から出て玄関へ行った。胸の中はまだ荒れ狂っていた。もしも僕がいなくなったら、今夜のことをお父さんとお母さんは後悔するだろうか。

エ

でも、絶対に許してやるもんか。

そっと鍵を開けて外へ出る。マンションの入り口を出てすぐのところに、家の物置がある。その中にしばらく乗っていない僕の自転車がぽつんと押し込まれている。僕はそれを引っ張り出して、埃をかぶったサドルに跨った。

(中略)

漕ぎ疲れた足は重く、緩やかとはいえ上りの道は僕の膝を震わせた。自転車を押しながら後悔しはじめたときだった。奥に明かりが見えた。自然と急ぎ足になった。近づぐごとに明かりはどんどんはつきりしてくる。そして僕は見た。

木々の向こうに菱形に編んだ鉄のフェンスがあった。明かりはそこから漏れてきているのだった。僕はそこに自転車を止めた。フェンスに近寄って中を覗くと、そこは何かの施設のようだった。フェンスの真っ直ぐ正面には、のっぴの常夜灯が一本そそり立って、柔らかな橙色の光を放っていた。

微かに獣の臭いを感じ取って、僕は気づいた。そういえば、この丘の前の分かれ道を手左に行く動物園があったはずなのだ。

もっと子どものときに、お父さんとお母さんに連れてきてもらったきり、ここしばらくは訪れていない。面白かった記憶はない。僕が楽しみにしていたライオンやトラは、殺風景でフェツツっぽい檻の中でみんな寝ていた。ライオンは百獣の王というけれど、僕がそのとき見たライオンはそこらへんをうろついている汚い野良猫がそのまま大きくなったのと同じように思えた。

B

している僕に、お父さんは言った。

「こういう猛獣はヤコウセイだから仕方ないよ」と。

なら、日も落ちたこれくらい時間ならば、違うものが見られるかもしれない。

フェンスの下は破れていた。動物園はとうに閉園時刻を過ぎているはずだけれど、僕は好奇心に負けてしまった。自転車を漕いでここまで来て、喉が渴いでいたのもある。中の自動販売機でジュースでも買って一休みしようと思った。僕はフェンスの破れ目をくぐった。

動物園の敷地内に立った瞬間、少し湿った涼しい風が丘の上から吹き下りてきて、僕の首の周りの汗をすつと引かせた。丘の暗がりから見えたのっぽの常夜灯の輝きが、心なしか強くなったように思えた。そろそろと歩いて動物園を巡る園路に出る。

当然、人影はない。僕は呆然となって辺りを見回した。動物園は、子どもの頃の記憶とは随分と違っていた。何の変哲もない檻や、殺風景なコンクリートの施設が並んでいただけだったはずなのに、いつの間に改装したのか、動物がいるであろう建物は、壁がカーブを描いたり、思いがけないほど高さがあったりして、その外観だけでもわくわくするほど楽しそうだった。丘に広がる動物園は、当然奥に行けば行くほど高くなる。のっぽの常夜灯はその奥までずっと続いていて、早くこっちへおいでよ、と僕を手を招いているみたいだった。

動物園の見取り図を見つけた。

『ほっきょくぐまの島』『ペンギんの遊び場』『もうじゅうの王国』『あざらしの海』『るいじんえんの森』

大きなレストランや休憩所もある。僕はからからに渴いて中でくつつきそうになっている喉を触った。そこには自動販売機がきつとあるに違いない。

大きな動物が吠える声が出て、僕はびくつとなった。お腹の中まで震わせるような声だった。ライオンだろうか、それとも。

「ああ、君は」

すぐ近くに男の人の声を聞いて、僕はもつとびくつした。振り向くと、薄い灰色の作業着にキャップを目深にかぶった人が、常夜灯を背に立っている。動物園の飼育員というのはいきなり分かった。半袖の作業者の胸と帽子の正面に、動物園の名前がプリントされてあったからだ。

「フェンスの穴から来たのかい？」

閉園後の動物園に、しかもちゃんとした入り口から入らなかったことが、どうしてかは知らないけれどバレている。怒られると思って僕はビクビクしながら頷いた。そうして飼育員のおじさんの表情を探った。でもその人の顔は帽子のつばの陰に隠れて、よく分からなかった。

「……一応名前を覚えてくれるかな」
僕はちよつとためらったけれど、^④断れる立場じゃないことくらいは承知していた。

「M小学校六年の、遠藤正です」

もしかしたらすぐに家や学校に電話をかけられて、大人を呼ばれるのかな、と思っただけれど、おじさんはゆっくりと僕の頭に手を伸ばし、撫でてくれた。

「こんな時間に、お父さんやお母さんは心配していないの？」

僕は首を振った。

「していないと思う。お父さんとお母さんが寝てから家を出たから。僕、家出したんだ」

「おやおや」

おじさんの声や口ぶりから、僕はその人をお父さんよりも少し若いくらいかな、と思った。背はお父さんより高く、袖から出ている腕は筋肉がついていて、⁽⁵⁾カッコウ良かった。

また、低い吠え声ほこえがした。僕が身を竦めると、おじさんは笑ったようだった。

「アムールトラだよ。行って見てみるかい？」

帰れと怒られるかと思ったのに、おじさんの言葉はちよつと意外だった。僕は何度も頷いた。

(乾ルカ「真夜中の動物園」より)

(一) 〓 線部(1)、(3)の読み方をそれぞれひらがなで答えなさい。

(二) 〓 線部(2)、(4)、(5)のカタカナをそれぞれ漢字に改めなさい。

(三)

A

、

B

に入る語句として最も適当なものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号をくりかえし用いてはいけません。

- ア がっちり イ きつぱり ウ がっかり エ どつきり

- (四) ——— 線部①「僕のそんな反応」とありますが、どうしてこのような反応になったのですか。その理由を説明した次の文の に入る語句として最も適当なものを後の中から一つ選び、記号で答えなさい。

「お父さん」の指摘が だったから。

- ア 冷淡 れいたん イ 図星 ウ 的外れ エ 大ざっぱ

- (五) ——— 線部②「僕は止まらない悔し涙を何度も手でこすった」とありますが、この時の「正」の説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 嫌な同級生とまたしても塾で顔を合わせなければならなくなったということを不満に思っている。
イ 同級生に嫌がらせをされていることを両親に言えないまま、今まで過ごしてしまったことを後悔している。
ウ 自分が今置かれている状況になったのは、何もかも自分に原因があるのだと両親に決めつけられて憤っている。
エ 親との約束を破るつもりはなかったのに、分からない問題ばかりで宿題ができない自分を嘆いている。

- (六) 次の表現は、本文中の ア エ のどこに入りますか。最も適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

お父さんとお母さんが互いを責めて罵り合うのを想像する。うんと悔やめばいいと思った。言い過ぎた、正は悪くない、悪いのはお父さんだ、いえお母さんも悪かった……。

(七) — 線部③「ヤコウセイ」とありますが、このカタカナ表記はどのようなことを表していますか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 小学六年生になって反抗期はんこうきをむかえた今では、父の言ったことは聞く気にならなかったということ。
イ 今も昔も父は、正には理解できないような難しい言葉ばかりを使って話していたということ。
ウ 両親と動物園に来たころはまだ幼かったので、その時にはこの言葉の意味が分からなかったということ。
エ 以前動物園を訪れた時には動物を見ることに夢中で、父の話が耳に入らなかったということ。

(八) — 線部④「断れる立場じゃないことくらいは承知していた」とありますが、これはどういうことですか。この説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 夜中の動物園に子ども一人で見ているのはあまりにも不自然なことであるから、飼育員に名前を尋ねられるのは当たり前だと思ったということ。
イ フェンスの穴から入ってきたのを見られてしまったのだから、これ以上飼育員を怒らせないように素直すなおに従うしかないと考えたということ。
ウ 動物園に繰り返し無断で侵入しんにゅうしたことは紛れもない事実であるから、両親や学校に連絡れんらくされるのは仕方ないことだと考えたということ。
エ このまま名前を言わないで逃げ出したとしても、相手が大人なので自分の足の速さでは逃げ切ることができないと思ったということ。

〔問題三〕次の文章は〔問題二〕の本文の続きです。これを読んで後の問いに答えなさい。

真夜中、丘の中の小道を通り、破れたフェンスをくぐって動物園へ忍び込むと、最初の晩に会ったおじさんがいつもいて、僕を待っていてくれた。

お客さんのいない施設を巡りながら、おじさんから動物のいろいろな話を聞いた。ホッキョクグマやアザラシの施設も、『ペンギんの遊び場』と同じく、プールの内側から動物が泳ぐ姿を観察できるようになっていて、特にホッキョクグマは、運が良ければお客さんめがけて水に飛び込むところが見られるという。観客の頭がホッキョクグマにはアザラシなどの餌に見えるからだそうで、僕はあの白い巨体がざぶりと水中にダイブする姿を想像して、心臓が C した。

おじさんが世話をしているペンギンたちは、いつも固まって眠っていた。喉に黒いヒゲ模様があるペンギンの後ろには、小さな灰色の綿毛が守られるようにいた。ヒナはすっかり安心しきって幸せそうだった。おじさんはそんな様子を見ては、口元をほころばせていた。

おじさんのいろいろな動物の話は、僕にとって、とても面白いものだった。動物といえは三年生のときに先生に勧められて、シートン動物記を学校の図書室から借りたことがあるけれど、半分しか読まずに返してしまった。そのときの僕は、動物なんてあまり興味がなかったのだ。でも、おじさんの話は別だった。

「動物をただ見せるんじゃないくて、ここは動物がどういう特性を持ってどういう行動をするか、それを中心に展示しているんだ」

「野性のオランウータンは生涯のほとんどを樹上、つまり高い木の上で過ごす。見てごらん、あんなに高いところに口を渡しているけれど、オランウータンはちっとも怖がらないで、すいすい渡っていくんだよ」

動物園に着くまでに自転車を漕いで漕いで、本当は足も疲れているはずなのに、おじさんと一緒に施設を見て回っているときは、そんなことなど一つも気にもならなかった。おじさんはお喋りするのが上手くて、小学生の僕にも分かりやすいように話してくれるから、ますます僕はおじさんの話に聞き入ってしまうのだった。

「この飼育員はお客さんの質問を聞いて答えたり、おじさんが君にしているように簡単な説明もしたりする。こういうふうに」おじさんは『ペンギんの遊び場』屋外飼育場の前に立てられている掲示板を、右手で D と叩いた。「施設

の動物に関するお知らせや豆知識みたいなものも、おじさんたち飼育員が書くんだよ。おじさんはちょっと字が下手だけど、お客さんたちが読んでくれるのを見ると、とっても嬉しくなるね」

そうして、またおじさんは眠る。ペンギンたちを眺めては「E」する。このおじさんは本当にペンギンや動物のことが大好きなんだなあと、僕はなんだかペンギンたちが羨ましくなっちゃった。

そうなのだ、考えてみれば動物園の動物たちは羨ましいことだらけだった。黙っていてもご飯がもらえて、おやつがもらえて、当然勉強もしなくていい。それから僕は、おじさんも羨ましいと思った。動物園には僕に荷物を持たせたり、机の中にゴミを入れる小林も大林もないのだ。あいつらと仲良くなるのは難しそうだけれど、ペンギンなら魚をあげればきっと懐いてくれる。

だから僕は、ある日おじさんに言ったのだ。

「ここにいる動物は気楽そうでいいよなあ。好きなきときに寝て、好きなきときに起きて、学校に行かなくてもいい。毎日がお休みみたいでさ。僕もペンギンになりたい。でもそれは無理だから、僕もおじさんみたいな動物園の人になりたい」

おじさんは優しい口調で訊いてきた。「どうして?」

「だって、動物となら仲良くなれそうだから。僕、クラスに友達いないし、お父さんやお母さんも勉強しろって怒るばかりでムカつくんだ。動物なら世話をして餌をあげていたら、きっと僕のことを好きになってくれるんじゃないかな」

のっぽの常夜灯が続く園内の道をゆっくり歩いてたおじさんは、そのときふと立ち止まって、僕を見た。やがておじさんは「ちょっとおいで」と言っって、すたすたと園内の奥へ進んで行った。僕は早足で後を追った。

着いたところはワオキツネザルの檻だった。

「こっちに二頭いる。雄と雌だ」おじさんは腕を伸ばした。「そして、こっちにも一頭。こっちは雄」

ワオキツネザルの檻は二つあった。

「わざと分けているんだよ」

おじさんは檻の中の木の根元で眠るワオキツネザルに顔をやりながら、静かに言った。

「こっちの二頭が、一頭のほうを仲間外れにしたんだ。一緒になって理由もないのにしつこく噛んだりしてね。それでどうとうこいつは大怪我をってしまった。だから離しているんだ」

「仲間外れ？ 動物にも仲間外れがあるの？」

おじさんは頷いた。

「残念だけれどね、同じ種類の中で時々あるんだ」

そしておじさんは僕に向き直った。

「君は動物となら仲良くなれそうだと聞いたね。それはとっても正しいことだよ。君に限らず、人間が動物と仲良くなるのはそれほど難しくはない。同じ種類の存在、つまり人間が人間と仲良くやっていくほうが、本当はとても難しい。でも、だからこそ動物園にとって『動物となら仲良くなれるから動物園の職員になりたい』というだけの人は困るんだ。だって動物園には飼育員も園長も獣医じゆういさんもいろんな人がいっぱいいて、みんなで協力し合ってお仕事をしているからね。人間ともちゃんと仲良くなれる人じゃないと。それになにより、毎日来るお客さんも人間だよ」

「動物が好きな人は駄目なの？」

「動物だけが好きな人は駄目だよ。⑤ 動物も大好きで、人間もうんと好きという人がいいんだ」

僕は少し悲しくなった。動物の中でも仲間外れがあるという話はショックだったし、⑥ 動物園の人になりたいと言えば飼育員のおじさんが喜んでくれると思っただけれど、それでもなかったし、僕をいじめる小林と大林という『人間』はどうしたって好きになれそうもない。お父さんやお母さんも頭にくることばかり言う。

うつむいた僕の頭を、またおじさんは大きな手でぐっと掴つかんだ。

「人間みんなと仲良くするのは本当に難しいよ。無理だと言ったほうがいいかもしれない。どうしたって好きになれない人もいるだろう。それは仕方がない。けれどね、嫌いきらひというところで止まっちゃいけない。嫌いな人にも、自分が知らないだけで、もしかしたらいいところがあるかもしれないって、そういう可能性は考えておかないといけないんだ。あとね、人間には一ついい能力がある。それは言葉を扱あつかえる能力だ。思ったことや考えたことを相手に伝えることができる。もちろんそれには責任も伴ともなうけれどね」

「本当に動物園の飼育員になりたいなら、お父さんとお母さんの言うとおおり、勉強しなくちゃ駄目だよ。もちろん今から塾に行かなきゃいけないということではないけれど、中学高校と、ちゃんと真面目に勉強することが大事だよ」

おじさんはペンギンの施設の前でそう言った。

(九)

C

、

D

、

E

 に入れる語として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|------|---|------|---|------|---|------|
| C | — | ア | わくわく | イ | そわそわ | ウ | うきうき | エ | どきどき |
| D | — | ア | ずんずん | イ | どかどか | ウ | こんこん | エ | みしみし |
| E | — | ア | はらはら | イ | そわそわ | ウ | にこにこ | エ | ぴりぴり |

(十) — 線部⑤「動物も大好きで、人間もうんと好きという人」とありますが、それはどのような人ですか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 動物と仲良くできるだけでなく、人とコミュニケーションをはかり、仕事の上で仲間と協力し合ったり、お客さんに動物の魅力みりよくを伝えたりできる人。
- イ 動物の世話を熱心にできるのは当然なことだが、様々な工夫くふうによって来園者を増やし、動物園の収益を今よりも上げることに貢献できる人。
- ウ 動物と仲良くなることは当然だが、人間とも言葉を用いてうまく付き合っていく、たとえば苦手な人であっても我慢がまんして付き合うことができる人。
- エ 動物の生態についてよく知っているばかりではなく、それを面白おかしく説明しながら、お客さんとコミュニケーションをとることができる人。

(十一) — 線部⑥「動物園の人になりたい」とありますが、正はどうしてそのように思ったのですか。三十五字以内で答えなさい。
(句読点も字数にふくみます)